

弓道雑感

ニューガラスフォーラム

七尾 純児

Junji Nanao
New Glass Forum

弓道を始めたきっかけ

旭硝子に入社して配属先となった研究所では、所員のレクレーションの催しとしてテニス、ソフトボールと共に弓道の大会があり、初めて和弓を手にしたのが弓との出会いである。入社後3年間ほどはバレーボール部に属して神奈川県内の大会にも出ていたが、ジャンプがきつくなりだし、次第に弓道に移って行った。今まで弓道が続けることとなったきっかけは「ある一言」です。弓道部に入りたてのある日、先輩部員と共に当時の日本鋼管の弓道場で合同練習をするというので、一緒について行き、弓を引かせてもらった。そこに錬士の先生が居られ、弓を始めてどれくらいかと聞かれたため、一週間ですと答えたら、「筋がいいな」と言われた。錬士の先生に言われ、すっかりその気になり、それ以来、途中転勤のため中断があったものの、今も弓を続けている。人を褒めることは大切なことだと今でも思っている。

和弓とアーチェリー

日本の弓はなんと当たらないことか。始めて和弓を引くと、とんでもないところに矢が飛んでいく。長年修練していてもなかなか的に安定して中らない、まして的の真ん中には。一方、



写真1 左奥が筆者

アーチェリーではいかに真ん中に中てるかを競っている。また、矢飛びも良い。狩りや戦争ではアーチェリーにとってもかないそうもない。アーチェリーは狙いの中心に中ることのみを目差し、そのための工夫が道具、とくに弓になされ改良が続けられてきた。一方、和弓では、狙っているところをそのまま何もせず離すと、右上にそれる。射る人の工夫で狙ったところに真っ直ぐ行くようにする必要がある。なかなか中らないようにできている道具を用いて如何に中てるか、そして自分たちの思っている「真の射」を目差して修練している（周りから見るとなぜって思うかもしれませんが）。ただ、真の射にどれだけ近づけたかはかなりはっきりと弦

音（離れた時に弦が弓を打つ音）、矢飛び、的中、残身（残心）などで分かる。日本の弓は非常にすぐれたセンシング機能をもっていると言える。真の射を目差す目的からすると、なかなか中らない方が良いのである（ただ困ったことに、弓を押している左手と弦を引っ張っている右手が離れでともにゆるんでも、バランスが取れておれば中ってしまうこともある）。しかし、弓を射るからには狙ったところに中るように努力する。だが、「中てたいと思う気持ちを捨て去らないと真の的中は出来ない」と昔より言われており、私も含め弓道を修練する方々はそのことで悩んでいる・・・「尽而不求（尽くして求めず）」、「一箭に誠をつくす」。悩まなくても良いところに弓道ゆえに悩んでしまう。心が直接射に大きく影響する。的を前にして弓をいっぱい引き込み、矢を離すまでの、時間で言えばほんの数秒（長くとも10秒もない）だが特に心が揺らぎ、煩惱との戦いの連続である。

この悩みも弓の魅力の一つかもしれないが。

弓道とプロセスアプローチ

プロセスアプローチの概念が品質マネジメントシステム ISO 9001 の2000年版で明確に示され、プロセスアプローチを用いて品質マネジメントを行うことを規格の序文で奨励している。ニューガラスフォーラムに来る前の4年間、AGCグループ全員の「仕事の品質」を上げようということで（今もAGCでは継続して取り組んでいる）、旭硝子本社の品質向上推進室に所属していた。工場勤務から突如仕事が変わり、ISO 9001の規格の勉強から入ったが、序文のプロセスアプローチでまずつまづいた。教えを請う中で、射の極意として伝えられてきた「射法八節」はまさにプロセスアプローチであることに気づき、その後の規格の理解が進んだ。「射法八節」を図1に示す。「足踏み」、「胴造り」、「弓構え」、「打ち起こし」、「引き分け」、「会」、「離れ」を各々プロセスと捉え、「残身（残心）」は先に挙げた「弦音」、「矢飛び」、「的中」

と共に、「プロセスの結果」即ちISO 9000で定義されている「製品・Product」（定義3.4.2 Product:result of process）と理解できる。ちなみに、昭和になって「残身（残心）」が加えられて「射法八節」となったようである。「足踏み」～「離れ」の各々のプロセスを正しく行うための秘伝（今では秘伝ではないが）が弓道教本一巻から四巻に記されている、まさに宝典と言える。

弓道では、昔より真の射（良い製品）を得るためには射法八節の各プロセスをきちっと正しく行い、積み重ねることが必要であると伝えられてきた。これはISO 9001:2000の基本思想と一致している。

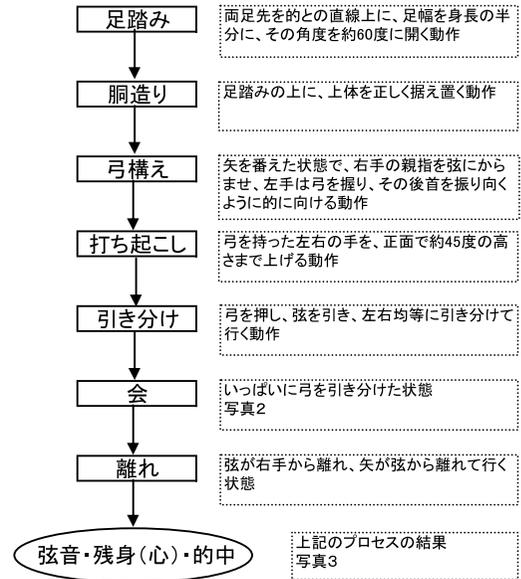


図1 射法八節のプロセスフロー図

弓具の工夫

和弓では道具への工夫がなされていないとの誤解を与えたかも知れない。かたくな？に2メートルを超える長い弓を古来から使用し続けてきたが、弓を握る位置は弓を三等分した下の方の三分の一ほどの位置にあり、矢を離れた時に生じる振動の節に位置している。そのため、矢を離れた時の振動を余り感じない。また、見

えない所でも先人は工夫を重ねて来た。例えば、弓は何百年も前から竹と木の複合材料からなり、“にべ”という接着剤（膠系の接着剤、近年は合成接着剤がほとんど）で貼り合わせて作られている、一例を図2に示す。また、矢に対して色々工夫がなされている。麦粒といって中心部あたりが太く、両端に行くほど細くなっている矢、この矢は遠くに飛ばす時に用いられた。また、矢竹（篋・の）の表面を荒らして仕上げた矢、この矢は飛行中に矢の周りに生じる渦流をコントロールすることで矢飛びが良くなると言われている。

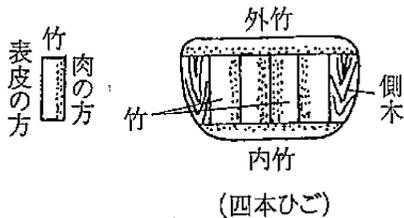


図2 弓の横断面
(弓道教本第一巻より)

最近では竹弓ではなく合成弓も多く使用されているが、その弓にはグラスファイバーやカーボンファイバーが使用されている。非常に性能が安定しており、多少乱暴に扱っても性能は変わらず、経時変化もほとんどなく、扱いやすい。しかし、竹弓と違って、新弓を慣らし、手入れをしながら弓を育て・維持する楽しみがないので面白味はない。また、弓を引いた時や離れ時の感じ（味わい）、弦音、さらには美しさではまだ竹弓がはるかに勝っている。そのためか、合成弓はフリーメンテナンス・矢飛び・的中において竹弓より優れた面が多くあるにもかかわらず、長く弓を続けている人は竹弓を愛用している。

私たちが普段何気なく使用している言葉にも、弓道用語を起源としたものが数多くある。

例えば、

「掛け替えがない」：彥（かけ）は弦を引くとき右手に着ける皮製の手袋のことです。弓や矢は

普段使用していないものを用いてもすぐに慣れるが、彥は日頃使い慣れたものでないとうまく引けないことから来ている。

「そんなはずはない」：筈（はず）は矢の一端に付けてある溝形状のもので、弓に矢を番えるとき弦をその溝にかまして使用する。矢を射ようとするとき、筈がないと矢を射ることができないことから来ている。

「手ぐすねを引く」：薬煉（くすね）は松ヤニと油を混ぜて練ったもので、現在は麻弦を作るのに使用している。武士の時代には、敵を待ち構える時、弓を持つ左手に薬煉を付けて、いつでも弓が引けるように準備をしていたことから来ている。

弓の楽しみ

「射の眼目は、自然の理を動作の上で表現することである」と弓道教本に書かれている。最近になってだが、うまく引けなくて悩むときには、「この動作において自然の理とは何か」に戻って考えることもある。あるいは、小笠原流で言われている「むりなく」、「むだなく」、「美しく」をキーワードとして自分の射を振り返ることもある。いずれにしても一射毎PDCA（Plan-Do-Check-Act）を繰り返す、そして大きなPDCAを廻している。

休みの日は、今日はここに注意をして、こんな風に引いてみようとう道場に向かう。弓を引いてみて、なるほどこれで方向性は違ってないとか、考え／実行し／反省することが妙に楽しい。もっとも、次の日に同じこと（同じと思っていること）をやってみても再現しないことが多いのが現実です。しかし、それ故にまた考え、実行してみる。

転勤した地では弓道場を探し、その地の弓道協会に加入させてもらった。そのため初めての土地でもその地の方々と、弓を通して親しく交わりを持たた。米沢市弓道協会（山形県）に8年、松阪弓道協会（三重県）に3年所属し一緒に弓を引かせてもらった。今は古巣の旭硝子研

究所の弓道部に所属している。色々な地域の方々、さまざまな年齢層の方々と交わることができ、試合にも十代から八十代（中には九十代の方も）まで特にハンデーもなしに一緒に試合が行われている。これも弓の大きいなる楽しみでもあり、良さの一つでもある。

今後

弓道は剣道などと同じく、5級～10段の段位。それと並行して称号（錬士、教士、範士）

があるが、周りの影響もあり一昨年12年ぶりに審査を受け、昨年2度目の審査で錬士をいただいた。現在、錬士5段であり、中堅といえる。今後も修練のドライビングフォースとして毎年審査を受ける予定である。また、機会があれば高校生のクラブ活動とか、新たに必須となる中学生の武道の授業のお手伝いできればと思っている。九十歳ぐらいまでは弓を引きたい、後30年ほどある。



写真2 会



写真3 残身（心）